

O2-008

乳幼児期の子どもを育てる母親の対児感情に関連する要因

水谷 恵里¹、宮崎 つた子²、永見 桂子²、
前田 貴彦²、斎藤 真²¹国立病院機構 三重中央医療センター、²三重県立看護大学

【背景】

近年の新型コロナウイルス感染症の感染拡大による外出の自粛等で、保護者のストレスが高まり、児童虐待の危険性も増すことが懸念されている。母親の虐待傾向にも影響する母親の対児感情は子どもの成長や様々な要因によって変化していくため、対児感情の変化を見据えた早期の介入が必要となってくる。そのため、対児感情に関連する要因を明らかにすることにより、児童虐待を防ぐ支援に繋がると考える。

【目的】

乳幼児期の子どもを育てる母親の属性と対児感情の関係、対児感情に関連している要因を明らかにする。

【研究方法】

協力を得られた乳幼児期の子どもを育てる母親に対して無記名式質問紙調査を実施した。調査項目は、母親の属性、対児感情、育児ストレスで、使用した尺度は対児感情尺度、日本版育児ストレスショートフォームである。属性と対児感情、育児ストレスとの関係をみるために、母集団の属性の項目と各尺度で Mann-Whitney の U 検定を実施した。また、母親の対児感情に関連する要因は、対児感情と育児ストレスを Pearson の積率相関係数を用いて分析した。

【結果】

配布数 349 名のうち 263 名から質問紙を回収し、無効回答 16 名を除いた 247 名を有効回答とした（有効回答率 94.0%）。35 歳以上の母親は 35 歳未満の母親よりも 5% 水準で拮抗指数が高い結果がみられ（ $p = 0.044$ ）、子どもの人数や年齢において有意差はみられなかった。対児感情の回避得点と育児ストレス「私は以前のように物事を楽しめない」（ $r = 0.293$, $p < 0.001$ ）という社会的孤立の項目で負の相関がみられ、拮抗指数とも正の相関がみられた（ $r = 0.335$, $p < 0.001$ ）。

【考察】

対児感情の拮抗指数は、35 歳以上の年齢の母親の方が 35 歳未満の母親と比べて高い結果であった。しかし、子どもの人数や年齢においては有意差がなかったことより、初産産に関わらず、35 歳以上の母親に対しての支援が必要であると考ええる。また、母親の社会的孤立と否定的な対児感情は正の相関があり、社会的孤立を軽減する支援が求められる。そのため、看護職者として家庭訪問や個別のカウンセリングにて関係性を築いていき、さらに地域においては感染症の流行下においても、感染対策を実施しながらのママ友作りの場の提供をしていく必要がある。

O2-009

乳児期における子育て中の母親の育児ストレスとコーピングに関する縦断調査：生後 3 か月から 1 歳 6 か月まで

三輪 桂子¹、玉置 美春¹、土川 紗穂¹、
玉腰 浩司¹、本田 育美¹、宮崎 つた子²¹名古屋大学大学院 医学系研究科 総合保健学専攻、²三重県立看護大学 看護学部

【背景】

親の育児ストレスは児への虐待要因であり、母親のストレスや取り巻く状況の把握は重要である。先行研究の多くは横断調査であり、児の発育に伴う母親のストレスやコーピングの縦断的变化は明らかではない。

【目的】

母親の育児ストレスとコーピングについて、児の発育（生後 3 ヶ月：T1、10 ヶ月：T2、1 歳 6 ヶ月：T3）に伴う縦断的变化を検討する。

【方法】

乳児を育児する母親を対象に T1～T3 の各時期で追跡調査を実施。質問紙は基本属性、抑うつ評価に加え、育児ストレスインデックス（PSI）、コーピング特性簡易評価尺度（BSCP）を用いた。反復測定分散分析、多重比較を行い、各スコアの変化について検討した。本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。（承認番号：170420, 2021 - 0330）

【結果】

3 期通しての解析対象者は 276 名。母親の基本属性は年代 30～34 歳 48%、核家族 91%、初産婦 42%。抑うつ傾向の母親は T1：18%、T2：16%、T3：20% を占めた。PSI スコアの時期別の比較では、総育児ストレスは T1 < T3、子の側面のストレスは T1, T2 < T3 であった。子の側面のストレスの下位項目「親を喜ばせる反応が少ない」「刺激に敏感に反応する／ものに慣れにくい」が T1 > T2, T3 となった一方で、「子どもの機嫌の悪さ」は T1, T2 < T3、「子どもの気が散りやすい／多動」は T1 < T2 < T3 だった。親の側面のストレスの下位項目では「社会的孤立」が T1 < T2, T3 だった。BSCP スコアは「視点の転換」のみ T1 < T3 だった。

【考察】

児の発育に伴う母親の育児ストレスは全体的には増加するが、「親を喜ばせる反応が少ない」等は低下し、「子どもの機嫌の悪さ」等は増加した。1 歳頃の児は歩行開始や発語増加など変化が著しい時期であるとともに、自我が目覚め自己主張の強くなる時期でもある。子どもが示す成長発達の 1 つひとつが、母親のストレスに影響しているものと考ええる。ストレス対処となるコーピング特性は「視点の転換」以外は変化が見られなかったことから、母親のコーピング特性は児の発育に伴って変化しないと考ええる。

【結論】

母親の総育児ストレスと子の側面のストレスは児の発育に伴い高くなったが、下位項目では生後 3 か月頃が高い項目もあった。また、母親は児が 1 歳 6 か月になると「視点の転換」のコーピングを多く用いるように変化した。